準備委員会企画 招待連続講演 1

アロマザリングの島の子どもたち
—— 多良間島の子別れ ——

根ヶ山光一
(早稲田大学)

Children in an Island of Allomothering: *Kowakare* in Tarama Island

KOICHI NEGAYAMA
(WASEDA UNIVERSITY)

日本教育心理学会第 57 回総会の招待講演において、「守姉（もりあね）」の風習との関連を中心に、アロマザリングの発達した多良間島で子どもたちがどのように育っているかを紹介し、その子別れの特徴を指摘するとともに、都会の子育てへの示唆を考察した。本稿はその要点をまとめたものである。

1 研究の社会的背景

「聞蔵Ⅱ」（朝日新聞のオンラインデータベース）で見だし語検索をしてみると、「子育て」という語は創刊から 1960 年代まで新聞記事の見出しにほとんどまったくといっていいほど登場せず、70 年代以降にうなぎ登りに増加してきている。また PsychINFO®（心理学系学術論文のデータベース）で「子育て」に関連する“child rearing”, “child care”, or “parenting” という語のいずれかが要旨とキーワードの範囲で使用されている論

文を調べてみると、同じく 70 年代から件数が急激に増加している（Negayama, 印刷中）。Bowlby が第二次世界大戦で親・家庭を失った子どもの研究からアタッチメントを提唱し、それが発達研究の中核的概念の 1 つとなったことや（van der Horst, 2011）、国連が 1970 年を国際教育年、1979 年を国際児童年、1985 年を国際青年年、1994 年を国際家族年としたことをふまえれば、20 世紀後半は子どもや子育てがそれまでになく注目された時代といっているかもしれない。さらに世界最大級の科学文献データベースである Scopus®によって、「“mother” と “child” と “stress” が要旨・キーワードにある論文件数」を「“mother” と “child” と “attachment” が要旨・キーワードにある論文件数」で割り込み、その値を年代毎に算出してみたところ、Figure 1 のような変化が明らかになった。この半世紀は単に子育てに関心が向けられたというだ

Figure 1 Scopus® で検索された「“mother & child & stress” の論文件数」 / 「“mother & child & attachment” の論文件数」の時代変化

けではなく、相対的に子育てのネガティブな面への注目がより大きくなってきた時代でもあったのである。

このことが何を反映し、何を意味するのかを考察することは、これからの発達心理学・教育心理学にとって非常に大きな課題である。とりわけ日本は子育てを母親に結びつけて考える傾向が強く（柏木, 2010; 大日向, 2000）、日本人の母親はその分だけ子育ての負担感を大きく抱えている可能性がある。そのような日本の状況においてこの問題は重く、その点から母親以外の子育てであるアロマザリングについて議論するのは大きな意味をもっている。

2 動物における子育て・子別れ研究

Harlow は、学習能力の発達研究の被験体であるサルの子体（幼体）が、保温のために飼育ケージに入れてあるタオルにしがみついて離れなくなるという様子から、有名な代理母実験を着想した（Blum, 2002）。針金製の胴体をもつ母親模型よりも布製の胴体をもつ母親模型の方が幼体から好まれるということを示したこの研究は、彼とそのグループによる一連の隔離飼育実験の成果（根ヶ山, 1983）とともに、その後の母子関係研究に多大な影響を与えた。おりしも動物行動学の分野でも Lorenz がインプリンティングという現象を雛鳥の鳥類で指摘したり、子育てを解発する子どもの幼体図式（図式）の存在が注目されたりして動物研究が親子（特に母子）の結合機制的モデルとなり、母子の親和性への関心が大きくなるとなっていた。アタッチメント理論もそういううねりの中で提唱されたものであった。

ところが動物研究は他方において、実は親の反発性をストレートに見せてくれてもいた。たとえばノンザルの母親は自分の子どもに対して噛んだり威嚇したりして子どもを離そうとすることがある。それは子どもの離乳期に特に顕著で、根ヶ山（2006）はそのような現象を「子別れ」というキーワードで考察してきた。子別れはもともとキツネの母親による離乳期の子どもに対する攻撃とそれに伴う親子分離に対して与えられた概念であった。子別れと似た言葉として「子離れ」があり、それは「親離れ」と対で用いられる。しかし親だけでもしくは子だけが、相手の状態と独立に相手から離れていくことは困難である。言い換えれば親子はシステムであるということで、子別れはその分離を一言でいおうとする言葉であって、それは単なる親和感情の低減ではなく反発感情の増加を含んだ言葉である。その反発性があるのはじめて子どもが自立していけるという意味では、子育ての最終ゴールは子別れである

という言い方もできる。

実際の親子関係においては、子どもは親に接触を求めるばかりではない。周囲の仲間、特に子どもに興味を持って近づこうとし、その結果として親子が離れることもよくあるし、また母親もそのような子どもの外界志向性を黙認したりすることもある。母親のそばを離れていった同年生まれの子どもが集まって、子ザルだけの大きな集団をつくって遊ぶというのは初夏の野猿公園でよく見かける光景である。子ザルはそういう行動をとりつつ徐々に成長していき、やがてオスは出自集団を離れて他の集団に移入していき、そこで繁殖を行うのである。上述のように Harlow は母子の接触の重要性を説いたことで知られているが、しかしながら同時に母子隔離を受けても同年齢の仲間との接触経験をもつ個体には行動の歪みが出にくいことを報告して、子どもの社会的発達において遊び仲間という存在が重要な意味をもつことを示唆している（Harlow & Harlow, 1962）。これは集団における体験が子どもの発達に重要であるとする集団社会化理論（Harris, 1995）の主張につながるものである。

また霊長類の集団には、多様なアロマザリングつまり母親以外の個体による子どもの世話が観察される（MacLamont & Ross, 2000）。母親・父親が子どもの世話をあたるのが遺伝子を残す最良のやり方ではあるものの、包括適応度の観点からは子どもと遺伝子を共有する親以外の個体がその子どもの世話をを行うことにも意味がある。そうすることによって母親の育児負担が軽減され繁殖の機会が増えるとともに、子どもにも多様な社会経験が与えられることになり子どもの後の集団適応にとっても有効である。子どもに若いメスが関わる傾向が強いのは、遊びながら子育ての学習の機会になっているためと考えられる（Lancaster, 1971）。このように親子間の反発性は、直接に子どもに攻撃行動をむけるという形で発現することもあれば、親子がそれ以外の個体などに引きつけられることによって、結果的にその隔たりを増すという形をとることもある。

3 子育ての楕円モデルとヤマアラシのジレンマ

子育ては、親和性と反発性の2つをとともに中心としてもつ楕円のようなものであると考えるべきである。個々の時点の行動は親和性と反発性という2つの要素の和として定まるものであり、状況に応じてその隔たりの比率は変化する。母親には、子を保護して愛したいという志向性と、子どもの存在が負担でそれから離れたいという志向性が共存するし、また子にも、親に

依存して愛情を確認したいという志向性と、相手の関わりを束縛と感じて自律的に行動したいという志向性が共存する。母子ともに、それぞれの心身の状態や場の状況、あるいは発達レベルに応じて、そのような志向性による親和性と反発性のベクトルは時々刻々と変化し、それによってダイナミックに相互の関係を調整しているのである（根ヶ山, 2014）。

そういった親子の関係はヤマアラシのジレンマにたとえられる。ヤマアラシは背中に鋭い針をもつ動物で、それを立てて身を守る。ヤマアラシのジレンマとは、相手に近寄ると相手と自分に針が刺さり、相手から離れると淋しいというヤマアラシの葛藤状態になぞらえて、対人関係のアンビバレンスを表現したものである。親と子は、その関係を時々刻々変化させており、決して安定し固定的なものではない。むしろ自分が相手に対してどう行動するかを、単に自分の利己的な欲求だけではなく、それに対する相手の反応の動向をあらかじめ見越して選択しているのであり、また相手もこちらの出方を予測しつつ行動を決めている。つまり親子は互いに相手の手の内を読み合って交渉しているのである。

根ヶ山（2014）は、母子それぞれに最適近接ゾーン（Zone of optimal closeness, ZOC）という接近の志向性と疎隔の志向性が釣り合った隔たりの帯があり、それは両者間で常に一致しているとは限らず、またそれはたえず増大したり縮小したりと揺らぎを見せるものとして母子相互作用のダイナミズムを説明した。その際、母子双方のZOCのうねりがうまく重なればその位置関係はその場で安定し、またともにZOCが現状よりも遠すぎるまたは近すぎる場合には両者の間に接近し合う行動や疎隔し合う行動が調和的に生じて、これも矛盾はない。他方、その時点での位置どりが母親にとってはZOCに対して小さすぎるのに子にとっては大きすぎる状況では、子は近づこうとし母親はそれを拒もうとするという形で、母子間に不協和が発生することになる。

実はZOCは、母子間のみならず父親やきょうだい、友だち・隣人や保育士などとの間にも存在するし、人だけではなく周囲の動物や植物、無生物との間にも存在する。母子の隔たり具合は、マイクロシステム・メゾシステムに散在するそのような諸々のエージェント間の「星座」的な相互布置の力学によって規定されているのである。このように、親和性ととともに反発性の存在を想定することで、母子間に接近・疎隔の豊かな相互作用のダイナミズムが生じる視点、また母子をよ

り広い環境に開かれたダイナミックな関係として捉える視点がもたらされる。このような視点は、冒頭に述べた子育てへのネガティブなイメージの理解にこそ必要なものと思われる。

4 多良間島におけるアロマザリング

私はこれまで10年あまり多良間島で、単独もしくはグループで調査を続けてきた（根ヶ山, 2012）。多良間島は、沖縄県宮古郡に属する南海の離島である。面積は約20平方kmで、もっとも高いところでも標高34.2mという海面にへばりついたような島で、そこに1,200人弱の人々が生活している（2015年10月末現在）。集落は島の北部に集中していて、人々の生活や子どもの育ち・教育に必要な施設や店舗なども大体そこにあり、徒歩圏に人々の日常生活のほぼいっさいが一望できる。島の基幹産業は、サトウキビ栽培と製糖、肉牛の飼養である。宮古島と石垣島という二大離島の狭間で観光業は盛んとはいえないが、我々にとっては幸いなことに、それが島の伝統的な生活文化の維持に貢献している。

島には伝統行事が年間20近くもあって、島の人たちはそれを大事に守り、受け伝えている。また、八月踊りと呼ばれる豊年祭は3日間島をあげての一大行事であり、島の人たちのプライドとアイデンティティの根幹をなしている。職域対抗バレーボール大会、三世代交流ゲートボール大会、トゥイ会（干支を基にした生年祭）などの行事も次々と開催され、その都度人々が集い、交流する。そしてその大人のそばで、子どもも群れ集って遊んでいる。

多良間村は2000年の国勢調査で、全国一合計特殊出生率の高い自治体（当時3.14）として注目を浴びた（ちなみに当時の最低は東京都渋谷区の0.75）。今でこそその数値は下降気味だが、10年後の2010年でも2.07で全国16位、子どもたちの溢れる島なのである。島には保育所・幼稚園・小学校・中学校がそれぞれ1つずつ存在するが、高校以上の教育施設はない。保育所から中学までのすべてが1施設ずつであり、それらが徒歩圏にあるということは、教育の選択パターンがシンプルで、子どもたちも思春期まで持ち上がりで皆一緒に学び続けるということを意味する。その一方で、高校進学のためには中学卒業後にそれぞれ親元を離れて島外で生活せねばならず、それまでの凝集的・等質的な仲間関係が一気に放散するという運命に曝されることとなる。

このように、島の子ども達は、青年期に厳しい現実

が待ち受けてはいるものの、それまでは島で仲間や地域の大人との親しく濃密な関係のなかで育つ。多良間島をはじめとした先島諸島を対象地にして、災害報告書（保育・教育施設で事故に遭って病院での医師の治療を受けた場合、治療費の還付を受けるために医師の診断書と共に提出する書類）の内容を過去に遡って集計し、埼玉県所沢市の実態と比較したことがある。そこで明らかになったことは、保育所・小学校を通じて、離島の子どもの事故の報告が相対的に少ないという事実であった。しかしそれを額面通りに離島の子どもの事故の少なさを示していると受け取ってはならない。なぜならば、診断名から事故の具体的内容を分析してみたところ、所沢で事故の総数を押し上げていたのは捻挫や打撲といった軽度のケガであって、骨折や裂創といった重篤なケガは両地域に同様かむしろ離島に多く発生していたからである。このことは、多良間島を含めたこの地域の大人が些細なケガ程度では子どもを病院に連れて行っていないのに対し、都会の大人は過敏に対応していたということを暗示している。つまり離島では、子どもは強くたくましいという大らかで肯定的なまなざしを周囲の大人から受けつつ育っているのである。

もう1つ多良間島の大人と子どもの関係をうかがい知る私たちの研究データとして、保育所からの子どもの降園観察の結果を紹介しよう。保育所に預けられている子どもは、毎日の朝夕送迎時に家庭・地域と保育所間での場面移行を経験する。その移行をどのように行い、そこで子どもが誰とどう出会っているかを調べたのである。それによれば、東京や埼玉の子どもは母親に迎えに来てもらって保育所を退出し、途中食材の買い物などを除けば自宅までほぼまっしぐらに帰る。その間おびただしい人々とすれ違っているが、ほとんど会話はおろか視線を交わすこともない。そして家に帰っても子どものそばに居るのはほぼ母親だけである。それに対して多良間島をはじめとする先島諸島の子どもは、保育所を出たあと祖父母の家や家畜の飼育場など様々な場所に立ち寄り、あるいは帰宅後も再び外出して自宅周辺で他家に上がり込んで近所の子ども

と遊んだりしていた。父親とも会う機会が多かったが、何よりも母親と過ごす時間よりも子どもとの時間の方が多いというのが大きな特徴であった。つまり都会では保育所と家庭という2点を母親が線で見つめているのに対し、島では保育所と家庭を含む地域の面的な環境のなかで、子どもが多様な人や動物の間を渡り歩きつつ緩やかに移行し、そこで遊んでいるといえよう。

講演で取り上げた「守姉」は、大人ではなく子ども、特に少女が母親代わり（アロマザー）となって赤ん坊の世話をするという風習であるが、それはこういった島の風土のなかで息づいているものである。守姉という風習について、具志堅（2013）は1965～2013年の民俗誌資料類を渉猟し、沖縄本島・久米島・宮古島・石垣島・竹富島など各地にかつては存在していたと報告している。根ヶ山は2010年に当時還暦を迎える60歳前後の島民の方々26名に質問紙を配付し、守姉をした・された体験をお尋ねした。この人達は島に保育所が開設される前に子ども時代を過ごした人たちである。そのうちの15名（57.7%）が守姉をされた経験があり、女性7名中4名（57.1%）がした経験があると答えていた（Figure 2）。過半数の島民が当時は守姉の経験があったということになる。した経験のある方のお話では、開始年齢は7～11歳、生涯に1～2名の子どもに対して行ったということであった。これはベビーシッターとは似て非なるもので、手当としての金銭的報酬はなく、赤ん坊の親から見込まれ誇りを持って務めるものだという。そしてその関係は一生にわたって続き、島を出ても機会があれば求めて再会するし、成人式などウツトゥ（守姉された子ども）のハレの日には来賓として招待される。還暦を迎える現時点での守姉に対する気持ちを問うたところ、感謝（26名中11名、42.3%）を筆頭に、親しみ（6名）、懐かしさ（5名）、そして誇り・尊敬・愛が同数（各4名）で続き、ネガティブな思いはまったく報告されなかった。「ある種、親以上の関係だ」との評もあった。

私たちは観察開始当時9歳の女兒と生後0か月の男児との間の守姉の事例を原則3か月毎に、守姉のいる

Figure 2 子ども時代に保育所が未開設だった島民男女における守姉体験

場面といない場面のセットで約1.5時間撮影してきた。赤ん坊が3か月の時点から6か月まではまだ守姉がそばにいても母親の抱きが多発していたが、しかし6か月の時点ではすでに、守姉が子を抱き母親が視野外に出るという状況がかなり見られていた。それは守姉の不在場面ではほとんど見られないことで、その場合子どもは歩行器に入れられてずっと母親のそばにいた。さらに10か月時およびそれ以降の守姉存在時の観察においては、母親はずっと視野外で子は守姉とだけ接触していたのに対し、守姉不在時には子は母親と抱き以外の身体接触を多発させていた。このように、守姉の存否によって母子関係は質・量ともに大きく様相を異にしていた。守姉の存在が母親の育児負担軽減に一役買っていたことは明らかである。

島の様々な年齢の既婚女性に対し、自らのきょうだいと自子の範囲に限って、守姉をした・されたかどうか、した・されたとしたら誰へ・誰からかを聞き取り調査した。その結果、守姉は以前には親族間、とくにいとこ（きょうだいの子とも同士の間）程度の血縁の開きがある関係と、血縁関係がないかもしくはきわめて遠縁の関係で最も見られやすかった。ウットゥの母親は「ダクアンナ」と呼ばれ、彼女も守姉関係にある少女とウットゥにとって特別の存在だが、父親にはそのような特別な呼称は存在しない。血縁がたどれるものに限定してその関係をさらに分析してみると、父方の親類筋よりも母方の親類筋の少女が守姉になっている率が有意に高く、母系のネットワークの強化機能が強く示唆された。ここには父親・母親間の血縁の確実度の違いという生物学的な要因が背後にあるように思われるが、同時に男女の性役割に対する意識が作用している可能性もある。

守姉という土着の民間伝承的アロマザリングと保育所における制度的アロマザリングとを比べてみると、まずは保育所での保育が専用のスペースで訓練を受けた専門家の大人によるプログラムに基づいてなされるものであるのに対して、守姉は地域に開放され子どもの遊びのなかで自由に展開されるものであるという違いがある。保育所で体験される対人関係は限られた年齢層に限られるが、守姉はその少女がもつ家族・友人等のネットワークに開かれている。さらに、保育園では保育プログラムが用意され、親はお金を払ってそのサービスを受け取るのに対し、守姉はそういった契約的關係で一時的に成立するものではなく、楽しさと選ばれた自負とで相互扶助的に行われ生涯にわたって関係が維持されるのである。そしてもう1つ大事な違い

として、子どもは保育所においては単なる受益者だが、守姉では少女への子育ての「教師」でもあるという点がある。

このように、正式な守姉は地域のネットワークを維持発展する重要な要となっている。地域の目のなかでなされるアロマザリングであり、とくに母-娘の家族と母のきょうだいの家族との結合や近隣家族の結合に貢献し、結果として母親の育児負担が軽減されていることにもなる。そしてそういった子どもを見守る島の大人の目は、同時に様々な形で子どもを保護し子どもたちと交流する目でもあることは、上述の通りである。

根ヶ山(2012)は、そのようにして子どもを取りまくアロマザリングの複合システムを、母親と子どもをつなぐ社会・文化的なインターフェイスと捉えた。それはアロマザーとなる人が子どもから高齢者までにわたる多様な形をとるが、とくに守姉やきょうだいなど子どもがアロマザーとなる場合は、その子どもがもつネットワークのなかにウットゥが遊びを通して引き込まれ、多様な価値観に触れつつ様々な子どもや家族との親密な関係を形成することが大きな特徴である。それはウットゥにとって、異なる豊かな社会ネットワークのクラウドを形成することになり、そのクラウドを状況に応じて取捨選択しながら生活することが可能となる。

母・子・モノが構成する三項関係において共同注意が生じる際、母子間の視野の共有が文化学習の重要な契機であると Tomasello ら (Tomasello, Kruger & Tanner, 1993) は考えたが、守姉の場合、視野の共有もしくは交錯はアロマザーとの間でもなされる。乳児は早い段階から他者が自分に向ける視線に敏感に反応するが (Reddy, 2003)、守姉はそのようなまなざしの送り手であるとともに受け手ともなる。守姉に導かれて異なる複数の価値観にふれ、その重なりの中で文化が学ばれるのである。多様な社会ネットワークに幼い子どもを引き入れる守姉は、Bronfenbrenner (1979) のいうメゾシステムの媒介者ということができ、子どもが地域の文化を学ぶ上で大きな役割を果たしていると考えられる (Figure 3)。このような子どもがもつ社会化・文化化の促進者としての機能を改めて再評価すべきであろう。もちろん守姉の存在によって子への母親の注意が疎かになるという弊害もあるであろうし、また実際に子どもが事故に遭う危険性も皆無ではない。しかし経験知としては、それらの弊害が深刻なブレーキ要因とはなっていないからこそ、その風習が定着しているということであろう。

Figure 3 守姉とメゾシステム

守姉は昔は親族結合の強化という意味合いが強く、その開始時には赤ん坊の親がご馳走を用意して少女の家を訪問し、まるで結納のように申し入れを行った。しかし最近はそのような正式の守姉の事例が減り、その代わり近隣・知人間で日曜ごとなど遊び感覚でなされるものが増えてきている。それは1972年の本土復帰以降、多良間島にも生活全般や保育・教育に本土化・本土並みといった波が押し寄せてきたことと無関係ではなかろう。学習熱が盛り上がり、小中学校でも勉強に力を入れてきた。その結果として高校進学率が復帰直後からコンスタントにほぼ100%となった。また79年には保育所が新設された。多良間島の子どもを取りまく世界が音を立てて本土化されているのである。その様を研究することは、我々が都会の子育てのなんたるかを再考することにもなるにちがいない。

引用文献

- Blum, D. (2002). *Love at Goon Park: Harry Harlow and the science of affection*. New York, NY: Basic Books. (ブラム, D. 藤澤隆史・藤澤玲子 (訳) (2014). 愛を科学で測った男—異端の心理学者ハリー・ハーロウとサル実験の真実 白揚社)
- Bronfenbrenner, U. (1979). *The ecology of human development: Experiments by nature and design*. Cambridge, MA: Harvard University Press. (ブロンフェンブレンナー, U. 磯貝芳郎・福富護 (訳) (1996). 人間発達の生態学—発達心理学への挑戦 川島書店)
- 具志堅邦子 (2013). 守姉という存在 地域文化論 叢 (沖縄国際大学大学院), 15, 45-63.
- Harlow, H. F., & Harlow, M. K. (1962). Social deprivation in monkeys. *Scientific American*, 207, 136-146.
- Harris, J. R. (1995). Where is the child's environment? A group socialization theory of development. *Psychological Review*, 102, 458-489.
- 柏木恵子 (2010). アロマザリングを阻む文化 根ヶ山光一・柏木恵子 (編) ヒトの子育ての進化と文化—アロマザリングの役割を考える (pp. 163-181) 有斐閣
- Lancaster, J. B. (1971). Play-mothering: The relations between juvenile females and young infants among free-ranging vervet monkeys (*cevopithecus aethiops*). *Folia Primatologica*, 15, 161-182.
- MacLamon, A., & Ross, C. (2000). Evolution of non-maternal care in primates. *Folia Primatologica*, 71.
- 根ヶ山光一 (1983). 剥奪飼育と行動変容—行動障害の発生 岡野恒也 (編著) 霊長類心理学 1 (pp. 191-237) プレーン出版
- 根ヶ山光一 (2006). <子別れ>としての子育て NHK 出版
- 根ヶ山光一 (2012). アロマザリングの島の子どもたち—多良間島子別れフィールドノート 新曜社
- 根ヶ山光一 (2014). 子どもの身体・発達とアロマザリング 子ども学, 2, 118-135.
- Negayama, K. (印刷中). Child-rearing (“Koso-

- date”) in Japan with a special reference to mother-child mutual negativity. M. Koyasu, S. Iwatate, & K. Negayama (Eds.) *Frontiers in Developmental Psychology: Japanese perspectives*, Tokyo: Hitujishobo.
- 大日向雅美 (2000). 母性愛神話の罫 日本評論社
- Reddy, V. (2003). On being the object of attention: Implications for self-other consciousness. *Trends in Cognitive Sciences*, 7, 397-402.
- Tomasello, M., Kruger, A. C., & Ratner, H. H. (1993). Cultural learning. *Behavioral and Brain Sciences*, 16, 495-552.
- van der Horst, F. C. P. (2011). *John Bowlby-From psychoanalysis to ethology: Unravelling the roots of attachment theory*. West Sussex: Wiley-Blackwell.